

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 **小羊学園**

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohituji@imix.or.jp

H.P http://www.imix.or.jp/kohituji/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30円

2007年7月20日

第 294 号

「次世代育成」に思う

理事長 稲松 義人

不思議なめぐり合わせで、ある大学で幼児教育・保育を学ぶ若い人たちに、障害児保育に関する講義をする機会がありました。私自身は、確かに知的ハンディのある子どもたちに関わる仕事をずっとしてきましたが、保育の現場に立ったことはありません。保育の仕事をめざす人たちに適切な講義ができるかどうか、少し躊躇するところもあったのですが、「障がい」があってもなくとも、すべての子どもたちがより良く育つために、私たちがなすべきことについて、一緒に考えてみたいと思って講義に臨みました。

これまでも「障害福祉」に関連する話をさせてもらう機会が時々ありました。そんなとき私は、私たちが「障害」とか「障害児」「障害者」という言葉で捉えていることがらは、実際にはかなり曖昧で、見方や考え方一つでその理解は大きく違ってくるということを伝えてきました。どんな人でも決して完全ではなく、様々なかたちで何らかの弱さや欠けをもっていると思います。そのことを自覚し、同じ人間同士としての理解から出発しなければ、「障がい」のある人の福祉は考えられないと

思っているからです。

それに加えて、今回は保育ということとがテーマだったので、人間の成長、発達について、学生たちと一緒に考える時間をもちたいと思いました。

私たち一人ひとりの成長は、この世に生まれてくる前からはじまっており、それは、自分自身はもちろん、親や周囲の人たちの意思とは別に、あらかじめ遺伝子の中に組み込まれた成長の道筋に沿ってなされてきたのです。そこには人類としての進化の過程が記憶され、もっと突き詰めれば、命あるものとして人類以前から命をつないできた大切な情報が詰まっているということです。実際に、ごく初期の胎児は、哺乳類か爬虫類か魚類かの判断もつかないような形に見えますが、やがて進化の過程をなぞるかのようになり、徐々に人間らしい身体に成長して誕生の日を迎えます。しかし、逆に人間は、養育者から守り育てられることなしには、人間として成人に達することができない存在でもあります。生まれた後の環境によって、個々の育ちぐあい(性質)に大きな影響を受ける存在なのです。

人が成長するために意図的に関わってくれる身近な大人(多くの場合は親の存在が大きい)の態度によって、大きな影響を受けますが、今はその大人自身が、自分の生き方について迷い、よく分からなくなってしまうような時代ではないかと思えます。

私たちは、悠久の時代から、遺伝子を分け合ってきた多くの生き物たちとの共存の中で、人類がこれまで積み上げてきた生き方を忘れてしまい、身の回りに起こる急激な変化に心動かされて、一時の目先の判断で子どもたちを育て、彼らの人生を混乱させてしまっているような気がします。たとい、弱さや欠けがあったとしても、子どもたちがそれを越えて生きていく力をもつために、私たちは、つながりの中に生きる命のあり方を伝えていかなければなりません。

子どもたちは一人ひとり違います。その中には「障がい」があるがゆえに特別に配慮する必要のある子どももいるでしょう。子どもたちが成長していく過程で、どこに特別な配慮を必要とする原因があるのかを、保育者として気付け力をもちたいと思います。

少子化社会になって「次世代育成」が社会的な課題になっています。しかし、講義を終えた後に書いてもらった感想を一つひとつ読ませてもらうと、今の若い人たちも、子どもたちを大切に育てたいと、純粹に考えていることが伺え安心しました。

そんな気持ちに水を挿しているのは、ひよっとすると、ずっと受け継がれてきた命のことを忘れてしまい、目先の生活の豊かさだけに心奪われ、表面的な「自己実現」に夢中になっている大人たちではないかと思うのです。

活動内容は表一の通りです。

午前中の散歩では施設の周りを歩きます。施設を一周するコースから、三〇分ほど歩くコースまであり、利用者の身体的機能やその日の状態、また猛暑日など気候条件も考慮しながら支援員と一緒に歩いています。また最近では、一昔前に比べ施設の周囲に建物が増え、それに伴い交通量も増加しており安全面でも配慮が必要になってきています。利用者の平均年齢四十八歳。そろそろ高齢化の対応も考えていかなければならない時期ではありますが、まだまだ若い利用者もいますし、老化を少しでも遅らせるよう、決して十分とはいえない職員数で日々歩んでいます。

午後は前述の通り各班に分かれて活動しています。職員より先に活動場所に来る人もいれば、誘ってもなかなか参加しない人など様々です。まだ来ていない利用者呼びに行っている間にすでに来ていた利用者がどこかへ行ってしまふこともあり、「さあ始めるぞ」という頃にはすでに終わりの時間が近づいている、なんてこともあります。

生産的な活動もある中で、必ずしも毎日作業がはかどる日ばかりではありません。ですが毎日の活動を通して利用者に関わっていくこと、そのことが何よりも大切なことだと思いつつながら利用者と共に支援員は日々過ごしています。各班の活動の様子はまたの機会に詳しくお伝えしたいと思います。お楽

しみに。

以上施設内の活動のほかにも、わかぎには（ご存知の方も多いと思いますが）本体施設から離れた「工房わかぎ」という施設外作業場があります。現在は二つの班が交替で月曜日から金曜日まで通い、地域で生活している利用者と一緒に作業しています。支援センターわかぎでは新法施行以前から生活の場と日中活動の場の分離を実施してきました。分離することで一日のリズムが生まれ、生活にメリハリが出てきます。その効果は利用者の様子からも明らかです。しかし、残念ながら建物のスペースの限界があり、わかぎの利用者全員が通えないのが現状です。また、通うことができたとしても五〇人全員が同

表 1

班 名	午 前	午 後
工 房	毎週工房わかぎでの作業	
A 班	隔週、工房わかぎで作業 施設内整備（草刈など）	
B 班	・さをり織り・折り染め	
C 班	紙すき	
缶つぶし班	散 歩	空き缶つぶし
E 班		畑作業・ドライブ

じ場所に行くことが良いとも断言できません。

わかぎの利用者にとってどのような日中活動が良いのか。高齢化、活動場所、新法、利用者個々の課題などに向き合いながら、充実した生活を送ることができるよう日々模索中です。



二年目のオリーブの樹

主任 鈴木 龍一

オリーブの樹は平成十八年に障害者デイサービスとしてスタートしました。このときに初めて、『オリーブの樹』という名前が誕生しました。以前は、支援センターわかぎの日中活動場所（作業所）『工房わかぎ』という名前で、毎日わかぎの利用者が十五名ほど通って作業をしている場所でした。

平成十六年頃より在宅障害者の方々にも「工房わかぎ」を利用していただくことと受け入れを始めました。当時の在宅利用者は二名でした。

その後平成十七年に三名の養護学校卒業生を受け入れ、在宅の利用者五名・わかぎの利用者十八名の二十名を超える作業所になりました。また、養護学校からの実習依頼者数も増え日中活動場所の整備が急務となり、職員会議等

で検討を重ねていました。当時の在宅障害者は『施設機能利用事業』という制度を利用し、支援センターわかぎのショートステイとして工房わかぎを利用していました。

また、一方では地元の『手をつなぐ育成会』が中心になって「浜北地区に日中活動の場を設けたい」という声をあげて活動されていきました。支援センターわかぎの秋祭りではバザーを行ない、その収益を活動場所設置に役立てようとして協力いただきました。

そして平成十八年四月から「社会福祉法人小羊学園 障害者デイサービス オリーブの樹」として、法人では三日の通所施設ができました。当時の利用者は十一名で、そのうち五名は『グループホーム（現ケアホーム）ひまわり』の利用者でした。

平成十九年度になり「障害者自立支援法」の施行に伴い、施設名が「生活介護 オリーブの樹」に変更になり、利用者も十七名になりました。それと時を同じくして、施設の増築工事を始め十二月に完成しました。食堂・厨房・パン工房・トイレを整備し、利用者の快適な生活と作業の充実、また温かい栄養のある食事を皆さんに提供できるようにになりました。食事はセルフサービス形式で、時間内であれば自分のペービスで食事を取ることができます。パン工房についても練習を重ね、今後は地域で販売をしていきたいと考えています。

二年目のオリブの樹は、今以上に地域での役割が果たせるように努力することと、利用者の生活をより豊かにしていくことが求められます。

利用者の皆さんは、毎日作業を楽しみに通ってこられます。「楽しみ」がなくなってしまうのは豊かにもなれません。元氣いっぱいオリブの樹を、これからもよろしくお願いいたします。



ひまわり

米岡 千津子

五十人の大勢の横の繋がりのあった生活から、五人の生活に変わって二年半。十分とはいえないと思いますが、皆さん「ひまわり」がいいと言う。

何が良いか具体的に聞いてみました。「部屋がいい。二階は景色が良くて気持ちがいい」「静かになった」「洗濯機を自由に使えるのがいい」「トイレが近くにあっている」

「お風呂がいい。一人でのんびり入れない」「洗面台がいい」「虫が出るのが少ない」「旅行がいい。自分が行きたい所へいける」さらに考えながら：

「もっといいベッドにしたい」
「もっといいテレビにしたい」
「もっと遊びたい」「どっちも暑い」



「もっと大きなお風呂がいい」
「〇〇さんと暮らしてみたい：」と希望もたくさんある。

二十年も前の事で、思い出す会話があります。「五人より三人。二人より小さくても一人になれる部屋がいい。そして三畳から六畳と、人は誰でも良い環境で暮らしたいと思っている。」
『支援センターわかぎ』の四つのユニットに分かれた、当時ではまだめずらしかった、より少人数での暮らしの設計に関わった方の言葉です。
こんな生活がいいなと思うことをまず描き、少しずつ形にしていかなければ何も変わらないでしょう。

コミュニティの再生をめざす② 浜松市教委・初任者研修受入

今年も八月一日と二日に、浜松市教育委員会が実施する新任教員の研修として、浜松市内の小学校中学校の新任の先生方数名が、小羊学園など施設で体験実習をされました。現場での実習はほんの数時間でしたが、短い体験を終えたあとのまとめの時間に一人ひとり感想を聞かせてくださいました。その中で何人もの方が、それぞれの学校での日々の実践を考え直すためのヒントを得たことをお話くださり、私たちも嬉しく思いました。学校教育においても、数年前から特別支援教育という新しい取り組みが始まり、一般の小中学校でも、教育を受けることにおいて何らかの配慮が必要な子どもたちのことを視野に入れた実践が進んでいるそうです。一人ひとりのニーズに応えるということに関しては、重い障がいのある人たちとの出会いの中で気付かされることは多いと思います。そのためにも、これまで続けてきた小羊学園での出会いの場の提供が、未来を担う子どもたちの教育を考え直すためのヒントになれば嬉しく思います。

支える会だより

2007年度小羊学園を支える会寄付金報告

7月分 47件 1,100,000円
(累計 147件 3,026,631円)
皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

小羊学園改築計画にご協力ください

(口座名義)「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店 (普通) 040005
静岡銀行細江支店 (普通) 043483

問い合わせ先：小羊学園

〒431-1304 浜松市北区細江町中川 7440-1
電話 053-437-0826

編集後記

若樹学園は、一九七八年四月に開園した成人の入所施設です。〇〇学園というのは、子どもの施設のイメージだからということ、支援費制度施行に合わせて「支援センターわかぎ」と改称しました。また、地域への展開を意識し、短期入所や通所事業、一部の利用者は地域での生活への移行にもチャレンジし、施設としてのイメージはだいぶ変わってきたように思います。昔から入所する人たちの高齢化問題は、小羊学園も経験していない今後の大きな課題です。今年は、特別に厳しい残暑が続きます。皆様、どうぞくれぐれもご自愛くださいますように。(一)